ジェットロンが幻想入り！

スカイワッフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジェットロンが幻想入り！

【Ｎコード】
Ｎ００３６Ｖ

【作者名】
スカイワッフル

【あらすじ】
デストロンの主力部隊――ジェットロン。
その中でも指折りの戦死、スタースクリーム、スカイワープ、サンダークラッカーはユニクロン戦争で戦死してしまう。
その後、スタースクリームは幽霊となりガルバトロンに復讐を試みるが、失敗。そして数百年後、スタースクリームは宇宙の果てでスカイワープとサンダークラッカーのスパークを欠片を発見した。だが、その瞬間彼らは突然光に包まれる。彼らは『理想郷』――『幻想郷』にいた。

幻想入り（前書き）

スタスク「やったぜベイビー！また俺様が主役だ！」
サンクラ「俺もだぜ！」
スカワ　「今回は一応俺たち3人が主役だぜぃ！」

幻想入り

ここは何処の銀河でも小惑星でもない、遠い遠い宇宙の果てだ。
そこにはただ壮大な宇宙とキラキラと光る星だけしか無い。

そんな寂れた宇宙の果てに、人影があった。

『クソ、どうせ俺なんかなぁ・・・・・・』

その人影の正体はスタースクリーム。

巨大な変形ロボット、トランスフォーマーと言う種族一員だ。
悪の軍団デストロンの航空参謀としてその名を轟かせていた彼だが、
デストロンの破壊大帝ガルバトロンに反逆罪で処刑されたのだ。
だが、彼のスパークは『不死身』であった。
彼のスパークはその名のとうり、いくら殺しても消えない。
ゆえに彼は死なない。
彼は幽霊の様に他者の体に取り付き、対象物の意思など無関係で操作できるなんともチート級な能力だ。
その体で幾度となくガルバトロンに復讐を試みるが実行した数だけ失敗した。

そして復讐を諦め、数百年経っていた。
彼はその時の中、復讐を諦めたのだ。

そして現在に至る訳だ。

今の彼はボディを失った為、半透明な姿だ。まさに幽霊その物だろう。だが、ロボットで幽霊と言うのもおかしな話だ。
だから、的確に言えば人間が言う幽霊とは違う。
人間が言う幽霊は、魂が成仏できず、現世に残った魂。
彼の場合、スパークがまだ生きている状態。
一見同じに見えるが、幽霊は死んだ事になっている者。
だが、彼は正式には生きている。
トランスフォーマーはスパークさえ残れば『生きている』のだ。

彼はこんな状態になる以前の時点で『１０００万年以上生きている』
そして彼はデストロンに所属、そして幾度となくメガトロンを陥れようとした事か数は知れない。
それ程、野心に燃えていたのだろう。

だが、はっきり言えば彼はもう希望など試みていない。
『不死身』と言う能力がある訳で、時間などいくらでも有る。と言う理由もあるが、恐らく完全に気力がない。

『チッ、なんだよ・・・・。このスタースクリーム様を殺しやがって・・・・・・・・・。ん？』

彼は不貞腐れていたが、ある物に目がとまった。
それは『二つ』の純白な光だ。
光はただ移動しているだけだった。
特に典型的な動きは無く、ただ軌道に沿って動いているだけ。

『・・・・・・・こりゃ・・・・・・、スパークか！？』

スパーク――――それはトランスフォーマーの魂と言える物だ。

彼はスパークを手に取った。
実質的に幽霊の体では物質に触れる事は出来ないが、彼の体はボディが無いスパーク。
及んで彼はスパークの訳で自分と同じスパークは触れる事は出来る。

『このスパークは半分以上が消し飛んでやがるな・・・・。消えてないのが不思議なくらいだぜ』

しばらく黙って眺めていた。
だが、次の瞬間！

強烈な光が巻き起こり、スタースクリームと二つのスパークを包み込む。

『な、なんだこりゃ！う、うわあああああああああ！』

＊

此処は、妖怪と人間が暮らす理想郷、幻想卿である。
今日の幻想卿は晴れでございます！そんな天気予報が聞こえてきそうな程晴れている。
自然が豊かな幻想卿にピッタリな天気だった。

そして、そんな青空に・・・・・・

「うわぁあああああああああああああああああ！！」

３つの影が宙を舞っていた。いや、詳しく言えば落下中である！

「グハッ！」

スタースクリームだ！

「な、なんだってんだ・・・・？・・・・・・あ？此処は――――地球か！？」

以前彼は地球に来た事があり、嫌な程思い出がある。
だが、次の瞬間彼は更なる驚愕を目の当たりにする。

「・・・・・・？」

そう、さっきまで無かったボディが、念願のボディが自分にキチンと正常に備わっていた。
そして、スタースクリームは3度目の驚愕をする羽目となる。

「さ、サンダークラッカーに、スカイワープ！？」

2つのスパークがかつての部下、サンダークラッカーとスカイワープに変わっていたのだ！

「「う、う～ん・・・・・」」

2人は頭を押さえながら立ち上がる。
二人はスタースクリームの存在に気がつく。

「て、テメェはスタースクリーム！ここで会ったのは百年目！よくもあの時宇宙に放り投げてくれたなぁ！てやんでぃ！！」

「お前のヒューズをぶっ飛ばしてやるぜ！」

うがあああああああッ
餌を見つけた虎の如く二人は襲い掛かってくる。

「ま、まちやが――――――ッ」

次の瞬間、二人の両肩のブラスターが呻りを上げる。
そしてそれと共に、爆発音と叫び声が響き渡る。まさにスクリームだ

「チクショウッ！よくもやりやがったな！こんどはこっちの番だぜ！」

スタースクリームは両肩のブラスターからナルビーム、胸のハッチからクラスターミサイルを発射した。
それらの発射物は二人を的確に捕らえる。

「「グアァァァァァアアアアアアア？！」」

二人はその場で倒れる。
見たかんじそれ程の負傷は無く、ただ気絶しているだけかと思われた。

「ヘッ、ざまぁみやがれ・・・・・・ん？」

スタースクリームはある事を思いつく。まあ、どうせ如何わしい思いつきだと思われるが・・・・。

（まてよ・・・・この二人を俺の部下としてコキ使わせるってのも良いなぁ！）

「よし、これから野郎共を運ぶとするか」

彼は二人に手を伸ばし、二人をかつぐ。

「お、重いなオイ・・・・・」

彼は重そうに歩きだす。

＊

「さて、何処か住めるような場所はねぇかな」

と、彼が周りを見わたす。

が、その瞬間。

「「・・・・・・ハっ！」」

サンダークラッカーとスカイワープが目を覚ました！

二人はスタースクリームに抱えられていると解釈すると、スタースクリームを蹴り飛した。

「ぐあッ！」

二人は素早くスタースクリームから距離を取った。

「スタースクリーム。感謝するぜ。わざわざ止めを刺さないでくれ

た事をな！」

「だがよぉ。俺達が目を覚ますって事を考えた方が良かったかもしれねぇぜぃ」

「ハッ、お前等なんざ殺しても俺にはなんの価値もねぇよ。逆にお前等を部下にしようって考えだからな」

スタースクリームは両肩のブラスターの調子を確かめ、不適な笑みを浮かべ言う。

「らしくないな。お歯向かう奴を真っ先に殺すのがお前のやり方の筈だ」

サンダークラッカーが過去のスタースクリームと今のスタースクリームを比例させるかの如く言う。

「お前等なんざ殺す価値もねぇぜ」

「な、なんだと！この野郎！ぶち殺してやろうかぃ！」

「殺れるモンなら殺ってみなよ。まぁやる前にお前を服従させてやるがな！」

「こ、んの野郎ッ！」

スカイワープは怒りに満ちた声で叫び、得意のワープ能力で『敵』の背後に回り込む。

「死ねッ」

そして彼は背後に回った後、短距離からミサイルを発射する。

「おっとぉ！」

スタースクリームは華麗に避ける。

「甘い！それは追尾ミサイルだぜぃ！」

それを聞いた途端、スタースクリームはニィと笑う。
まるで、今の現状の方が効率が良いと言わんばかりに――――

「甘いのはお前等の方だ！」

スタースクリームは物凄い速さで空中を駆け巡った。
そして、サンダークラッカーの前で横に旋回する。
そんな事をしてもミサイルはサンダークラッカーには当たらず、スタースクリームを追う筈だ。
しかし――――

彼は『ナルビーム』をミサイルにあてた。

ナルビームは電気回路をショートさせる麻痺光線。
そんな光線がミサイルに当たると、追尾機能はどうなるだろうか？

言うまでも無い。ショートする。

よって、ミサイルは追尾する事無く。ただ真っ直ぐにサンダークラッカー目掛けて飛来する。

「うわぁあああああッ！！」

サンダークラッカーの左肩にミサイルは直撃する。
彼はそのまま倒れた。

「さ、サンダークラッカー！」

スカイワープはサンダークラッカーに駆け寄ろうとした。
が、駆け寄る前に

ガシィッ

スタースクリームがスカイワープの首根っこを掴みあげた。
そしてあいた片手のブラスターを頭に胸のスパークがある位置に押し当てる。

そしてブラスターが強力そうなビーム砲へ変形した。麻痺光線『ナルビーム』から破壊光線『ナルキャノン』に変化したのだ。

「どうだ？俺に従う気になったか？」

キツイ声で言う。

「だ・・・・、だれがお前なんかに・・・・」

死ぬ恐怖に脅えながらも、プライドを優先し彼はそう言う。

「じゃあお前は死ぬしかねぇぜ」

彼は笑いながら即答した。
さっきは『殺す価値がない』と言っていたが『利用する価値もない』
そうとなると自分の邪魔になるだけ。
『今の彼にとって彼等は捨て駒程度』なものだ。

キュゥゥン

ナルキャノンから呻りが上がった。それと共に銃口から光が漏れる。
明らかにこのままではスカイワープは死ぬ。

が

「待ちやがれ！」

サンダークラッカーが叫ぶ。
彼は左肩が破損していた。
水色のボディの中から機械がむき出しになっている。

「スカイワープ。死んだらおしまいだ。此処は、黙って従おう」

「・・・・・解った」

出会ってすぐ別れる（前書き）

スタスク「なんかタイトルの時点で嫌な予感しかしねえじゃねえかよ！」
サンクラ「どうせ作者の事だ。馬鹿な事しかしないだろうよ」
スカワ　「まったくだ。ひでぇ文書きやがる」

出会ってすぐ別れる

彼等はどっかの山に来ている。
あの戦いの後、彼等は目立たない場所に行こうと移動し、川がある森を発見したのだ。

「よし、早速命令をだすぜ。お前等は今すぐこの村の事を調べるんだ」

「おい」

「なんだサンダークラッカー」

「俺の肩。直してから命令してくれないか？」

「そんな材料なんざねぇよ。この村の資源を強奪するしか道はないぜ？」

「まさか、テメェこの村を支配するとか言い出したりしねぇよなぁ？」

スカイワープが面倒臭そうな態度を取った。

「さぁな」

「どっちだよ・・・・・・」

「・・・・・・・・ッ！」

サンダークラッカーが突然険しい表情になる。

「どうした？」

スタースクリームが問いかけた。

「今、俺のセンサーが何か捕らえた。サイズは人間並み・・・・だが、人間とは別の反応だぜ！」

・・・・・・・・なに？

二人は状況を理解した。

「え！？」

突然、明らかにこの中の三人の物ではない声が聞こえた

「そこだ！」

「ひゅい！？」

サンダークラッカーは自分のセンサーを頼りに『ある者』を右手で掴み取る。

瞬間、さっきまで透明だった者の姿が『元の姿』を露わにする。

「な、なにするのさぁッ」

「・・・・・・・・」

「ヒューズがぶっ飛ぶ所だったぜ・・・・・」

サンダークラッカーが掴んだ者、それは――――

水色と青を二で割った様な色をした服と緑の帽子とリュックサックをまとった少女であった。胸元には鍵らしき物が吊るしている。

「な、なんだお前は・・・・」

スタースクリームは変な奴を見る様な態度で言う。

「わ、わたしは、河城にとりだ！河童なんだぞ！」

「なんでぃ、この村にゃ地球のモンスターが居るのかぃ？随分と人間よりな姿だが・・・・・」

「お前、さっき姿を周りの風景に擬態させてただろう？光学迷彩か？」

スタースクリームが質問した。

「よく解ったね。と言うより、そろそろ降ろしてくれないか？」

「あ、ああ」

サンダークラッカーは少女――河城にとりを地面に降ろす。

「見る限り、君達も人間じゃないみたいだね。しかも機械・・・・・。ぜひとも私に研究させてほしいものだ！」

「俺達は宇宙から来た機械生命体、トランスフォーマーだ。で、俺はスタースクリーム」

「・・・・サンダークラッカーだ」

「スカイワープだ」

二人は空気を読んでかの行動か、自己紹介した。

「で、にとり。お前は随分と発達した技術を持っているみたいだな」

「えっへん！わたしは幻想卿一の技術者だからね！多分」

「・・・お前、俺の肩治せるか？」

「う～ん。やってみなきゃ解らないよ？まあとにかく、私の家まで来て！」

サンダークラッカーの提案ににとりがそう返答した。

「よし！話は決まった。お願いするぜ！」

「「おい、俺達の一存無しにどっか行くな！」」

スタースクリームとスカイワープは一緒にツッコム

＊

時は進み、ここは河城にとりの家、もとい研究室。

「うーん・・・・。ふむふむ・・・・・・」

「どうだ？治りそうか？」

サンダークラッカーは今、巨大な台の上に乗っている。
そしてにとりがサンダークラッカーの肩の様子を見ていた。

その他二人は、そこら辺の壁に寄り掛かっている。

「うん、全然大丈夫だよ。でも、君達のボディって結構硬いんだね！」

「俺達は戦闘部隊だったんだぜ？大気圏位耐えるボディ位もってるさ」

スタースクリームが自慢げに言う。

＊

サンダークラッカーの修理は完了した。
サンダークラッカーは肩をグルグルと回し、調子を確かめる。

「すげぇな。完璧に治ってるぜ・・・・。ありがとよ」

「うん！」

「マジかよ・・・・トランスフォーマーを治せるって・・・・」

スカイワープがつぶやく。

「じゃあ、さっさとこの村の事を調査するかぁ！行くぜ野郎共！」

スタースクリームはガッツポーズで言い放つ。

「まったく偉そうによぉ」「威張りやがって」

「うるせー！」

三人はにとりの家から出ようと歩きだす。

「世話になったな」

サンダークラッカーは適当にお礼を言う。

「うんバイバイ。また壊れたら直してあげるからね！」

＊

ジェットロンの三人はにとりの家を出ていき、現在は外に居る。

「で、これからどうすんだぃ」
スカイワープが何気なく言った。
「知るかよ」
スタースクリームも何気なく言う。
「おい」
サンダークラッカーは静かにツッコムをいれた。
「そんな事なら・・・・・俺達が一緒に居る意味がねぇじゃねぇかよ。自由にしちゃくれねぇかぃ？」
スカイワープはこれまでの話しをぶち壊す様な話しを持ちかけた。
「俺もスカイワープと同意見だな。大体、俺はもうデストロンじゃない。これを期に俺はデストロンを脱退する」
サンダークラッカーは自らデストロン脱退を申し出る。
彼は大体、平和主義で無駄な争いが好ましくない。
そもそも、彼がデストロンに入ったのは上司のスタースクリームがデストロンに入ったから。
スカイワープは賛成していた様だが、彼は賛成していなかった――
だが、断ればメガトロンに何をされるのか解らない。
彼がデストロンに留まっていたのは、メガトロンへの恐怖からだった。

「・・・・正気かぃ？」

スカイワープは恐る恐る聞いた。

「ああ。じゃあな」

彼はそう言い捨てると、二人に背中を向け、立ち去ろうと歩きだした。

二人は数秒間手を振りながら歩く彼の姿を、何も言わずに見送る。

「チッ、釣れねぇ野郎だぜ」

スタースクリームは舌打ちをしながら悪態をついた。
だが、何処か寂しそうな感情が感じられた。
そしてその感情は、スカイワープも感じていた。

「残念だぜぃ・・・・まあ、俺はデストロンは脱退しないが、お前に従う気は無いぜぃ。じゃあなぁ」

そしてスカイワープも、何処かに立ち去る。
彼はデストロンに忠実だが――スタースクリームには忠実ではない。
スタースクリームはもう散々だ、と言わんばかりにウンザリしている。
スタースクリームはデストロン？2なだけに、中でもトップクラスの実力を持っている。
だが、そんな彼の行動はロクでもない。だからウンザリしていた。

スタースクリームはまたも――一人になってしまった。

「ヘッ、好きにしてろ」

彼はそう吐き捨て、その場を去った――

出会ってすぐ別れる（後書き）

スタスク「俺も随分と信用がないのか・・・・・」
にとり　「元気だしなよ」
スタスク「はぁ・・・・」

出会いを求め－Ｓｔａｒｓｃｒｅａｍ－（前書き）

スタスク「俺の話だ！見逃すなよ！」

出会いを求め－Ｓｔａｒｓｃｒｅａｍ－

－Ｓｔａｒｓｃｒｅａｍ－

スタースクリームは空を飛行している。
彼は仲間（？）と別れ、この村を調査しているのだ。
彼はさっきとある山を抜け出したばかりである。

「はぁ、やれやれだぜ。やっぱり地球は土だらけだな。人間共は花とかそうゆう物を好むみてぇだが、俺にはイマイチ解らんぜ」

彼は目の前の光景の感想を述べる。
彼の下は一面花畑。綺麗な色とりどりの花が咲いている。
人間達からしたら美しい光景だが、彼にとってはただの背景に過ぎない。
だがもっとも気になったのは――――

さっき別れた仲間の事が気になってしょうがなかった。
戦力が減ったのもあるが――――もっと違うなにかが引っ掛かる。
だが、彼には理解できなかった。理解できたとしても信じられない。

「クソッタレが・・・・・」

そんな事思いながら飛行していると、花畑に差し掛かり3秒もしない間に、人影を見つける。
花しかない場所に人影がある事でかなり目立つ。空からみれば尚更だ。

彼はなんとなく、ただ気まぐれに人影に近づく。

仲間がいないため寂しいのかもしれない・・・・

そして、その人影から２０メートルくらい離れた場所で着地した。
ドシンッ、巨大なロボットが着地する振動で人影はこちらに気づく。
その人影は、十代後半くらいの歳で日傘をさしている少女であった。

「なあ、お前は妖怪か？」

スタースクリームは適当な言葉を投げかけた。
と言っても、適当なだけにかなり直行的な質問だった。

「ええ」

即答だった。
そこはかとなく、見下している様な返答だった気がした。
スタースクリームすこしイラついた。と言ってもあまり表には出しておらず、ただ機械の目を細めただけだ。

「用それだけ？用がないならさっさと此処から離れなさい」

そう言い、彼女はスタースクリームから花へ視線を移す。

「そんなに花が好きなのか？」

そんな疑問を彼女へぶつける。
彼は花に価値観なんて抱いてないゆえ、気になった事だ。

「そうね、少なくとも私が今一番好きなものはこの花達よ」

こちらを見ず吐き捨てる。

「なんで好きなんだ？俺様には解らないな。大体、何が楽しいんだ？何か得でもあんのか？」

「・・・・・・・・・・」

彼女は黙った。何も言わず、花を見ている。

「なんだ？無視か」

「どうだっていいじゃない。とにかく、下らない話しをしに来たんなら帰ってもらいたいわね」

「断る」

彼女は少し驚いたのか、肩が少し動く。

「なんで？」

「この俺、スタースクリーム様だからだ」

ビシィッ

親指で自分を指しながら堂々と答える。

いや、むしろ答えになってない。と言うより意味が解らない。

こんな答え方は、いわゆるナルシストか自己中心的じゃなくては言えないだろう。

「はぁ？」

その解答を聞いた途端に彼女はスタースクリームを見る。

それと共に、彼女の厄介そうに思っていると一発で解る様な表情が見える。

「意味が解らないわ」

「とにかく、だ。お前に指図される筋合いなんてないって事だぜ」

偉そうに言う。

「貴方、合うのは初めてだけど随分と馴れ馴れしいわね」

不機嫌そうな表情を向けた。

それに対しスタースクリームは、まるで子供を見る様な目で彼女を見る。

「お前、こんな所に一人でいて虚しくねぇのかい？」

「私はこの花達の面倒をみなきゃならないの。例えどんな事があろうとも、私は花を優先するわ」

「花――ねえ。俺にはあまり理解できないな」

少女は黙った。

そして数秒間流れた後

「貴方、たくさんの生物を殺しているわね。それも――私よりたくさん」

「？」

スタースクリームはキョトンとした。何故そんな質問が出てくるのか？

確かに、彼はたくさんの生き物、生命体を殺してきた。
敵対していたサイバトロン、人間、モンスター。挙句の果てには仲間であるデストロンもだ。
とにかく、自分の邪魔になる者は全て抹殺しようとした――――。
その結果、かなり多く生物を殺していた。

「なんで解った？確かに俺は邪魔になる奴なら真っ向から潰しに掛るタイプだけどよ」

「勘よ」

「・・・・・まて、『私よりたくさん』だと？お前も殺しをやってんのか？」

「ええ」

素っけなく答える。

「・・・・で、その理由は？」

「この場に無断で入ってきたから――――かしら？」

スタースクリームは疑問を感じる。
無断に入ってきたから殺す？じゃあ俺をなんで殺さないんだ？
と、スタースクリームに脅えている――――その可能性もあるが、怖がっている節などない。

第一、こんなに馴れ馴れしく話す事自体おかしい。

「もうひとつ聞いていいかしら」

「なんだ？」

「貴方に――――仲間はいるのかしら？」

「ッ！？」

彼の思考回路が一瞬凍りつきそうになった。
何かがおかしい。思考回路が異常な反応を感じ取る。
彼は焦った。表にはあまり出してないつもりだが、彼は明らかに動揺していた。
思考回路がショートしそうになる。
そのたびに、冷却装置が凄い勢いで可動し始める。
瞳が揺らぐ。スパークも――――己の体も？
彼は自分に何が起きているのか解らなくなってきた。

焦りが裏にでて、彼は咄嗟にこう答える。

「黙れ」

これくらいしか思いつかない。
彼女の質問に答えられない。いや、答えたくない。

「そう」

薄く彼女は笑った。
小馬鹿にするような態度でいった。

「おい。今馬鹿にしただろ」

「さて、どうかしら」

「チッ、まあいいや。俺は大事な用がまだあったんだったな・・・。じゃあな」

彼は空へ飛び立とうとするが――

「ねえ、最後に一つ言いたい事があるんだけど」

「なんだ」

「普通なら『二度と来ないで』って言ってるけれど、貴方なら出入りする事を特別に許してあげる」

笑顔で言った。

スタースクリームの表情が歪む。

何故？彼女とはさっき話しただけだが、『縄張り意識が強い』と言う事は解っている。

しかし彼女は自分に出入りを許した。

理解できない。

「なんでだ？」

「貴方には・・・・私と通ずる『何かが』あるからよ」

「・・・意味が解らねぇな」

「そのまんま。私の勘がそう知らせてくる」

「・・・・・・そうかよぉ」

そういい、彼は空を飛び立った――――

＊

スタースクリームは花畑を後にした後、再び空を駆け巡っていた。
と言っても――――方向など関係無しに突っ走っている為、何処に行くかは解らない。そもそも彼は此処の事をあまりしらない

彼は今、ビークルモードになっている。
その速さは本当の戦闘機より速く、まさに『神速』と言ってもいい位だ。

「・・・・・・」

彼は無言だった。
何も考えてない。
さっきの妖怪の言っていた事が頭で繰り返されていた。
『貴方には・・・・私と通ずる『何かが』あるからよ』
なんだ？何がだ？
彼はイマイチ理解できない。
俺と通ずる――――
狡猾さ？実力？多殺？姿？
おもいつかない。大体、彼は彼女の事をよくしらない。

「なんだってんだよ。まったく意味が解らねぇ。アイツは何が言いたいんだ？」

・・・・・・・ガンッッッ

「ぐあぁッ」

「グォッ」

突然、何かに激突した。

「？」

彼はロボットモードに戻る。

「畜生誰だぃ！俺のぶつかりやがった野郎はぁ！」

皮肉をこめて言う。

だが、彼は瞳を大きく見開く。

要するに驚いたのだ。

何せ、ぶつかった相手はかつての――――

「て、テメェは・・・・・デバスター！」

スタースクリームがぶつかったのは、ビルドロン。もといデバスター。

「スタースクリームか」

デバスターはそう言うと、元の六体に分裂する。

そして、スクラッパー、ロングハウル、グレン、ミックスマスター、スカベンジャー、ボーンクラッシャーに分かれたビルドロン部隊。

彼等は、元々デストロンの建設部隊として活躍していた。
ビルドロンのリーダー格のスクラッパーが、スタースクリームに申し出る。
「お前は死んだんじゃなかったのか！？」
スクラッパーが言った途端、他のメンバーも思い出したかの様に騒ぎ始めた。
「確か・・・あの時、ガルバトロン様に・・・」
「それより、あのラッパ壊された時ムカついたよな」
「そうだ！あのラッパ高かったんだぞ！？」
「その腹いせを今ここで晴らしてぇんだけどよ」
「いいや、折角見つかったデストロンを殺す気か！？」
そんな会話が聞こえてきた。
「おい。物騒な話してねぇか？」
「気にするな。それより、なんで生きてるんだ？その後も幽霊になったんじゃなかったのか？」
「気づいたら変な光に包まれてな」
すると、ビルドロン全員は驚いた顔をした。
そして顔を見合わせる。
「「「「「「俺達と一緒だな」」」」」」

声をそろえて言う。

「はぁ？」

「俺達は、マグマの中に突き落とされたんだ」

「いいや、大抵のデストロンは平気だろう？」

そう。デストロンのボディはマグマに耐えれる。
個体差はあるが、大抵は耐えられるのだ。

「いや。その筈はだろう？そして、陸に上がろうとした瞬間、おかしな光に包まれてよ。気づいたらこの村にいたって所だ」

スタースクリームは険しい表情になる。

（まてよ・・・・。俺も大体同じ方法で此処に来ているな・・・。もしかしたら、俺達は『誰か』に意図的に収集されているのか？）

「・・・・おい。スタースクリーム」

突然、グレンが話しかけてくる。

「んだよ」

グレンはスタースクリームの肩を指差した。

「その花――――まさかあのゆうかりんランド・・・・違う違う。『太陽の畑』に？言ったのか？」

スタースクリームは指差された肩を見る。
肩には一輪の花が『刺さっていた』
スタースクリームは一瞬凍りつく。
刺さってる。明らかに意図的に刺した物だ。
その証拠に、花は硬かった。鉄の様に。
スタースクリームは『あの女・・・』と呟いて花を抜き、話しを戻した。

「なんで解るんだ？（ゆうかりんランドってなんだよ）」

「俺もあの花畑に行った事あるんだよ。その時、同じ花を見たんだ」

「へッ。花なんてお前らしくない」

スタースクリームは小馬鹿にする様に言う。

「お前もまさか彼女にあったのか？」

「・・・・・まさかアイツ？あの日傘をさした」

「ああ。それでお前何もされなかったのか！？」

はぁ？どういうこっちゃ
スタースクリームは首を傾げる。

「何もされなかった？と言う事はお前は何かされたって事か？」

「思い出したくねぇ」

グレンはブルブルと震え始める。

そんな彼の代わりに、ロングハウルが代わりに話した。
「いや、グレンの奴、花畑から帰ってきたと思ったら、全身傷だらけ。おまけに右手がもげかかっていたぜ」
「俺達がリペアが得意じゃなかったらどうなってた事か・・・」
ミックスマスターがヤレヤレと首を振る。
「・・・・・・・・・・」
スタースクリームが唖然とした。
あの女・・・・何者だ？
という疑問が加わった。
「お前等は今どうしてんだ？」
「建設屋を営んでるぜ。『ビルドロン工業』ってんだ。この村は中々良い所だ。妖怪の友もできたしな」
「は？」
予測不可能な返答にスタースクリームは肝を抜かれる。
建設屋？なんでだ？
「なんでだよ」
代表するかの様にスクラッパーが言う。
「俺達は思い出したんだ。『あの時』の事を――――メガトロンに洗

脳される前の事を――――」

（・・・たしかコイツ等元々は戦争をしたくないって言って、デストロンでありながら戦闘を拒んでいたな。だが、メガトロンに洗脳されてデストロンで働かされてた。
その洗脳が解けたってことか）

「元々、俺達は戦闘なんかに興味がなかったんだ！俺達の本当のやるべき事。それは建築！無駄な争いなんか要らない！俺達は建設する為に生れてきたんだ！だよな！」

「「「「オォオオオッ！」」」」」

スクラッパーの問いかけに五人は一斉に叫んだ。
もう無駄な戦いは御免だ！そういう事だ。

「で、スタースクリーム。お前はどうしてるんだ？」

「ああ、俺様はサンダークラッカーとスカイワープと一緒に此処に来たんだが――――行動する前にどっか行っちまったよ」

もう二度と会えないかもな。スタースクリームは悲しげに言う。
だがスクラッパーが「そんな事はない」と言う。

「この幻想郷は博麗大結界があるから。幻想郷外にゃ出られんのさ。だから、いずれは会えると思うぞ」

「なんだそりゃ」

「まあ詳しい事は俺達の拠点で話そう」

＊

此処は幻想郷の人の里の中にある巨大な建物。
外見はこちらの世界で言う『工場』その物だ。

「随分貧相な拠点だな」

スタースクリームはズバリと感想を述べる。

「まあ、そう言うな」

ボーンクラッシャーが返答す、木でできたトランスフォーマー用サイズの椅子を差し出した。
スタースクリームは椅子に腰かける。

「お前等、機械類以外にも木材を使うんだな」

「建築家は如何なる条件でも対応できるのがプロなんだよ」

スクラッパーが語った。

「で、この村は一体、どんな場所なんだ？」

「如いて言うなら、人間、妖怪、幽霊、亡霊、妖精、精霊。様々な生物が共存できる理想郷だ」

「・・・もう何を言われても驚かないぜ？」

「はは、俺達も最初そんな反応をしたっけかな？」

スカベンジャーが笑って言う。

「だけど・・・戦った事もあったけなぁ」

スクラッパーが上の空で言う。

「争い？」

「ああ。人間に妖怪退治を頼まれてなぁ。それで退治した。殺しては無いけど」

「なんで殺さなねぇんだ？」

「この村にはスペルカードルールって言う奴があってなぁ。スペルカードは俺達は無いんだが、『殺さない』ってルールは一応守ってるんだ」

「スペルカードっての知らんが、知る気もねぇから聞かないでおくか。で、お前等にどれくらい前から此処に？」

「１０００年以上前」

「１０００年！！！？」

「ああ。俺達は少しタイムスリップしてたらしい」

（あ？待てよ。俺が幽霊になったのは２００５年・・・それから宇宙を彷徨っていた期間は大体５００年。俺もタイムスリップしてるのか？）

「俺達以外トランスフォーマーを見たのはお前を合わせて2度目だ」

「・・・・二度目？」

「確か――――なんか忍者みたいな奴だったな。一人称が『拙者』とか－6つの形態を持っていた凄い奴だったよ」

「・・・・・」

「だが・・・・・」

スクラッパーが悲しそうな表情をする。
それに釣られ、ビルドロン全員が同じ表情になる。

「どうした？」

「いや、行方不明になってな。この幻想郷を最も愛した人物を守ったんだ」

「最も愛した人物？」

「八雲紫――――言うんだ。スキマ妖怪でこの村でもトップクラスの強さを誇る妖怪だ。そいつは彼女を守ったんだよ。皆に信頼されていたから皆悲しんだっけな」

「・・・・どんな奴かわ知らなねぇが、よっぽど親しまれてんだな。俺と違って」

「・・・・自覚があったのか・・・お前」

ロングハウルが呟く。

「うるせぃ！」

「まあ、騒ぐな。実は、彼への悲しみを静める儀式・・・というより祭りが、明後日行われるんだよ」

「そうかぃ」

「俺達は行くんだが、お前も行くか？」

「・・・・で、俺になんの得があるってんだぁ？」

「まぁ～、エネルゴンが飲み放題って所だな」

「・・・・・乗ったぜ！」

「「「「「そぉこなくっちゃなぁ！！」」」」」

「で、場所は？」

「いま電子地図のデータをインストールしとくさ。ほらよ」

スクラッパーから、電子化されたデータが送られ、スタースクリームがそれを受信した。

彼は受信した後、腕に設置されているモニタを展開させ、場所を見る。

「ついでに、俺達が知る限りの幻想郷ガイドが乗ってるぞ」

「そうつぁありがとよ。じゃあ、祭りの始まりで合おうぜ」

「ああ」

そう言い、スタースクリームはビルドロン本拠地を後にした。

＊

「アイツ等変わったな・・・・・。性格的には変わってねぇが、根本的に変わっていたな」

彼は空を見上げる。

「あのぉ、ちょっと良いですか？」

不意に、声を掛けられる。
スタースクリームは声の主を見た。

「？」

それは女性であり、赤い山伏風の帽子、フリル付きの黒スカート、白の半袖シャツを着た少女。
そして、彼女はスタースクリームの目の前まで飛んで来ていた。

「私、天狗の射命丸文といいます！」

「な、なんだよ・・・・。俺様は子供の付き合ってる暇なんてねぇんだ」

「つれない事言わないでくださいよ～。取材に付き合ってきださい。なにせ、スクラッパーさん達に続く、機械生命体なんですから！」

どうやら、ビルドロンはかなり有名たしかった。
まあ、千年以上前からいる上、巨大ロボットと言うだけであたりまえだが。

「・・・・・・面倒くせぇな。嫌だといったら？」

「追いかけます！私から逃げられる人なんていません！」

「試してないのになんで解るんだ？やってみなけりゃ解らんだろ！」

「・・・なるほど。私とスピード勝負をしたいんですね」

「俺様は速いぜ？見てみろ、この美しい翼、このキャノン、なによりこの美しい姿！速い証拠だ！」

「いや、あまり意味が解りかねますけど・・・・」

「ハッ、素人には解らねぇのかよぉ。まあいい。で、俺が勝ったら取材とかをやめてもらうぜ？」

「貴方が勝ったら取材を諦めます。で・す・が」

（取材をする・・・・とか言うんだろうな）

「明日私にキッチリ付き合ってもらいます！」

ビシィッ

そう叫び、スタースクリームを指差した。

その目は自信に満ちていた。

予想外の展開にスタースクリームは唖然とした。

「・・・・・・んでだよ」

「明日、かなり忙しいんですよ。私は新聞記者をやっていて、『文々。新聞』と言う個人新聞を発光しているんですけど」

「お前新聞記者なんだな」

「ええ。それで、実は明日、新しい新聞の発行日なんです。それで、届けるのを手伝ってもらいたいんです。あ、もちろん取材も受けてもらいます」

＊

二人は大空に来ている。

二人は縦に並び、レースの準備を整えていた。

そして、号令係の第三者もいる。それはミックスマスターだ。

「スタースクリームよぉ。下らない事で呼び出すのやめてくれねぇ

か？」

「うるせぃ！たまたま居たお前が悪い」

「んな理不尽な・・・・・」

「いいじゃないですか！お礼に後でたっぷり取材させてもらいます！」

「・・・・・まあ、ビルドロン工業の宣伝にもなるからなぁ」

ミックスマスターは渋々と納得する。

「じゃあ、始めるぞ。ルールは簡単。あの山のてっぺんをタッチして～最初にこっちの戻ってきた者の勝ちとする～」

「位置について～」

ミックスマスターは銃を空へ向ける。

「よ～い――――――――――ドンッ」

バシュンッ

十音と共に、両者は全力で空を駆け巡る。

ズキュゥゥゥウウンッッ

風を切り裂く音が炸裂する。

そして――――両者は驚く

（が、ガキのくせになんて速さだッ）

（私が追いぬけないなんて・・・・こんな感覚、何年ぶりでしょう

か）

（（互角の戦い！））

そう、彼等の速さは互角だった。
二人は一気に山のてっぺんを触り、ミックスマスターの居る方向へ向かう。

そして――――――――

＊

「あ、あ～」

ミックスマスターはオドオドしている。

「で、勝者はどっちなんだ！」

「え、と～あの～」

「はっきりしてください！」

「・・・・・・う～ん。ひ、引き分けだ！引き分け！」

「「は？」」

＊

スタースクリームと文は地上に降りていた。（ミックスマスターは帰りました☆）

「で、この場合どうなるんだ？」

「ま、まあ。両者引き下がるしかないですね」

「いや、俺が引き下がるとなったら俺が条件をのむ事になるだろう？お前が引き下がるなら俺が条件をのまない――話しにならん！」

「いいえ？何言ってるんです？貴方はどの道、新聞配りを手伝う事になりますよ？」

「んだと！話しが違うじゃねぇか！お前は――――あ」

スタースクリームは間抜けな声を上げる。
それに対し、射命丸文はクスッと笑った。

「そう――私は『貴方が勝ったら取材を諦めます』と言ったんです。その条件はのんであげます。ですが――明日私にキッチリ付き合ってもらう条件を諦めるなんて言っていませんから」

射命丸文は可愛らしく舌を出した。

「ぐ、ぐぬぬぬッ――――テメェ・・・」

スタースクリームは機械の歯を食いしばった。
彼は今にでも両肩のナルキャノンを発射しそうな勢いだった。
それに対し、文は余裕の笑みを浮かべる。

「では、明日博霊神社で会いましょう！」

「ムカつくガキだ！この借りはいつかしてやるからな！」

スタースクリームは不機嫌そうに答えると、何処かへ飛翔していった。

「ふふっ、可愛いですね～」

＊

「甘く見てたぜ・・・・妖怪にも速い奴はいるんだな・・・・」

出会いを求め－Ｓｔａｒｓｃｒｅａｍ－（後書き）

スタスク「展開が速いのはトランスフォーマーの特徴だな」
スクラパ「俺たちの建設も早いぞ！」
あややや「私のスピードも…なかなかですよ？」
スタスク「俺と互角ってどういう事だよ」
あややや「一応幻想郷最速って言われてますし・・・」
スタスク「この村も侮れねぇな・・」

グレン「もう勘弁してくれ！あとがきでもやられるなんて御免だ…」
幽香様「何もしないわよ」
グレン「ほ、本当か…」
幽香様「う・そ・よ」
グレン「い、いくら痛めつけられようと、どＭになんかならないぞ！」

出会いを求め－Thundercracker－（前書き）

サンクラ「俺の話だ。まあ、あまり期待はしねぇ方がいいぜ」

出会いを求め－Thundercracker－

Ｔｈｕｎｄｅｒｃｒａｃｋｅｒ－

サンダークラッカーは幻想郷を飛翔していた。
スタースクリームと縁を切り、彼は自由な生活を満喫しようという思いを寄せ、誰か住民を探していた。
住む場所が欲しいのだ。
デストロン流のやり方ならば、奪ってしまうのだが彼は温厚な性格の為、無駄な争うは好ましくない。
だからといって、そこらへんの森などで野宿する訳にも行かない。
いくら巨大かつ強力な力を持ったトランスフォーマーでも妖怪が居るのなら例外だ。
襲われる可能性だってある。
そして彼は妖怪がどれくらいの強さかは知らない。襲ってきても撃退できるか解りきった事じゃない。
と思ったからだ。
現に、『にとり』と言う少女とすでに友好を築いているが、修理してもらった上、住まわせてほしいなんていえない。

そして、彼はある屋敷に目をつけた。

「まあ・・・あたれるだけあたるか」

彼が目をつけたのは――――白玉楼。
かなり広い屋敷と庭があった。
実際ここは、多数の幽霊がいるのだ。
といっても幽霊がいるのは屋敷に限った事ではない。この『冥界』全体自体、そういう所なのだ。

まあ、サンダークラッカーが知っている筈もないが。
彼は屋敷に続く階段――――白玉楼階段を無視して、屋敷前に着地する。
「おい！誰かいないか！」
大声で呼びつける。
「・・・・・・・・返事がねぇな。直接扉をノックすればいいか」
そういい、彼は前屈みになり、襖の扉を壊れない程度に叩こうとする。
軽く一刺し指で扉をつつくだけ。
が――――
ガラァ
「はい？だれで――――ふぎゃっ」
「あ」
突然、扉が開かれたせいでサンダークラッカーは扉ではなく、出てきた人物を叩いてしまった。
出てきた人物は後に倒れてしまう。
サンダークラッカーは『やっちまったＺＥ』と言った表情をした。
「お、おい。大丈夫か？」

倒れた少女――――魂魄妖夢は頭を押さえてゆっくり起き上がった。

「い、いきなり何を――――」

するんですか！と言い切る前に彼女は驚いた。

無理もないだろう。いきなり巨大なロボットがいたからだ。

「またにょんな人――――いや、カラクリが現れましたね・・・・」

「人をみていきなりにょんな――――って言われてもな・・・理解できないぜ？第一、みょんってなんだよ」

サンダークラッカーは挨拶代わりとして疑問をぶつけてみた。

「教える気力もないので・・・・。それでなにか御用ですか？」

「ああ。実はな――――住む場所を探してんだ」

「いきなり唐突すぎませんか！？」

「とにかく・・・・だ。俺は住処に困ってるんだ・・・」

「え…と、田舎に泊まろう的なやつですか？」

「いや、そうじゃなくてな・・・。いや、本当に困ってるんだ！」

「わ、私には結論が・・・・少々お持ちください！」

そう言い、彼女は扉を閉めた。

「・・・・・なんか無理そうな予感がする。まあ、一発目からそう簡単に上手くいくわけないよな・・・」

ため息交じりな声で言った。
そして彼は空を見た。

（・・・よくよく考えれば――――こんな事をしてるのも楽しいモンじゃねえか・・・）

彼は若干、笑ってみせる。
と言っても、本人にしか解らない程度だった。
ほんの少し――――一瞬だけだった。

ガラっ

再び扉が開けられる。

「・・・・ん？」

出てきたのは、さっきとは別人の女性だった。
彼女はこの屋敷の主人――――西行寺幽々子だ。

「あらら～？随分たくましいお客さんね～」

陽気に、手元の扇子で口元を隠して言った。

「・・・お前がこの屋敷の豪い人なのか？」

適当な予想を立てて言う。
そんなサンダークラッカーの発言に彼女はまた微笑む。

「鋭いわね～」

「それで――話しがあるんだが、」

「知っているわよ。貴方ったら住む場所が欲しいのね？」

「そうだ。俺は此処に来るのが初めてな者でな・・・知り合いも少ないし、妖怪や幽霊とかあまり知らないんだ」

「いいわよ。特別に住まわしてあげるんだから」

「ほ、本当か！」

「ええ、でも条件付きよ？」

「条件？」

「貴方には私の部下になって貰うわ」

「・・・部下だと？どんな事をするんだ？」

「そうね～。みる感じ、貴方は力仕事に使えそうだから、警備とかかしら？」

「こっちに問いかけられてもこまるんだが」

「とにかく、話にのるのかしら？」

「・・・・まあ、全然大丈夫だ」

「交渉成立ね」

＊

サンダークラッカーはある倉庫に案内され、中に入った。
倉庫と言っても、日本風の倉庫だ。
大きさは、床の面積は１００×１００メートルくらいで、縦の大きさが３０メートル。
彼が住むには十分な大きさだ。

というより何でこんな巨大な倉庫があるのか？と疑問に持つ彼。
まあ、そんな事はどうだっていい。
すぐ住む場所が決まったのだ。

だが――――問題はまだある。
それはエネルゴンの調達。
いや、エネルゴンに限ってはいない。オイル、純エネルギー体ならんでもいい。

「探すか・・・メンドくせぇが」

そう言って彼は倉庫を後にした――――

＊

「あら？もう出てくのかしら？」

以外にも西行寺幽々子がいた。
「ああ、エネルギーを調達にな」
「カラクリにはお料理を食べて意味はなんてないのかしら？」
「まあな。後、倉庫貸してくれてありがとな」
「どうって事ないわ。元々全然使っていないし」
「そうか」
ピ――――
突然、彼の元に通信が入る。
どうせ、スカイワープらへんの奴だろう。
そう思い、彼は通信に出る。
「こちらサンダークラッカー」
『助け――――ザザァ…誰でもいい！助け――――ブチィ』
「ッ――――」
彼は驚きと真剣さを露わにした。
おかしい――――
いきなりの通信。
雑音が入り混じっているが、助けを求めていると言う事はすぐ解った。
発声回路からの声からして――――スカイワープでもスタースクリ

ームの声ではない。
第一、この通信はデストロン専用。
と言う事は、この村にはデストロンが3人以外にいると言う事だ。
にしてどっかで聞いた事がある様な声だ。
「？」
「すまねぇ。少し野暮用が出来ちまった！じゃあな！」
そう言い、サンダークラッカーは飛び立っていく――
「・・・・彼も色々大変なのね～」
＊
サンダークラッカーは全速力で空を飛翔した。
だが、音一つ立てず飛行していた。
戦闘機の飛行時の爆音は凄い物だが、彼は『音響を操る程度の能力』を持っている。
飛行時の音響を操作して音を消しているのだ。
「ここら辺の筈だな」
彼はロボット形態にトランスフォームし――
ズシンッ
着地する。
彼は周りを見渡した。

「・・・・・なにもないな」
彼が見わたす限り、ただの森。
木々はサンダークラッカーより、少し大きい程度だった。
彼は、適当に歩く。

「さ、サンダークラッカーか…！」

「ッ」
突然、自分を呼ぶ声が聞こえた。
さっきの通信の主の声では無いが、やはり聞き覚えのある声だった。
そう、彼が振り向くとそこには――――

「…だれもいない？」
誰もいない。
本当に影一つない。

「ここだ！」

「・・・・・穴？」
なんか地面に穴が開いていた。
しかも、人型の穴。
サンダークラッカーは恐る恐る穴を覗き込む。

そこには、ある知人がいた。
左手がレーザーガンで、単眼。そして前進紫色。
「レーザーウェーブか？」
そう。レーザーウェーブだ。
彼は自分にピッタリの空洞の中でピクピク、と機械らしくない動きで震えていた。
「だ、出してくれ…」
「お、おう、今出してやる！」
そういい、サンダークラッカーはガシッと肩を掴む。
そして少々手こずったが、彼を穴から出し事に成功した。
「た、助かった・・・・」
「なんでお前さんがこんな所にいるんだ？第一、なんで穴に・・・・」
「私にも解らん。巨大な敵がセイバートロンに襲来したと思ったら圧し潰されて――――現在に至る」
「・・・・まさかお前も」
「…？何か知っているのか？」
「いや、しらねぇよ。『俺達』も死んだと思ったらここに来てたんだ」

「俺達?他にも誰かいるのか?」

「ああ、スカイワープとスタースクリームの野郎だ」

「ふむ…私は一刻も早くセイバートロンに帰りたいのだ。何か方法はないのか?」

「俺もしらねぇよ。まあ、俺自体は此処から出る気はない」

サンダークラッカーはそう仄めかす。
レーザーウェーブには口もなく、モノアイと言う顔なのであまり表情は読めない。が、ムゥ、と呻る。

「これは困ったな…一刻も早くガルバトロン様と合流しなければ…」

「・・・・・まあ、俺にできる事はねぇ。じゃあな」

そう言い、サンダークラッカーはレーザーウェーブに背を向け、手を振る。

レーザーウェーブは黙りこんだ。
サンダークラッカーは仮にもデストロン脱退をスタースクリームとスカイワープに報告した。
もうデストロンとして生きるのはやめたのだ。

サンダークラッカーは改めてそう決意し、大空へ飛ぶ。

「・・・・あいつ…何かと変わったか…?」

レーザーウェーブはそう呟いた。

出会いを求め―Thundercracker―（後書き）

サンクラ「異様に短い文だったな…」

出会いを求め－Ｓｋｙｗａｒｐ－（前書き）

スカワ　「てやんでぃ！」

出会いを求め－Ｓｋｙｗａｒｐ－

－Ｓｋｙｗａｒｐ－

スカイワープは妖怪の山から出たが、どうやら裏の方へと来てしまったらしい。
なんか深い森を抜け、そのまま大空を突っ走ったら、なんか変な河岸まで来てしまった。
そしてさらに進んでいったら――――なんか河岸に戻っていた。

「おかしいぜぃ。実におかしい話しだぃ」

彼は間違いなく、真っ直ぐ進んだ。だが、戻っている。
それが疑問に残って仕方がない。

「てやんでぃ！悩んでたって仕方がなねぇ！こうなりゃ俺の能力を使ってやる！」

そう、いきなり怒りだした彼。

「いくぜ！」

そう言い彼は『ワープ』をした。
距離は自分がワープできる最大の範囲。約４キロだ。

そして――――

「ん？ぎゃぁぁあああ？！」

やはり、さっきと同じ場所に来ていた。
だが、今の彼にとってはそれどころではない。
彼は、ワープする範囲を増やせば増やす程、性能が反比例する。
1キロ～2キロまでは大した事ではないのだが、3キロ～4キロはヤバイ。
だから、今行ったワープは性能が最大まで落ちていた。
一応ワープはできるが――――行った後、バランスが取れない。
彼は地面に落下し、叩き落とされたのだ。

「い、いってぇ・・・。なんでこうなるのさ。んで、俺ばっかりヒデェ目みんだよ！意味が解らねぇんだ！」

「なに騒いでんのさ」

突然、すぐ左から声が聞こえた。
彼は、倒れたままで声が聞こえた方向に顔を向ける。
角度は９０度まがっているが、女性であるという事は確認できた。
それも――――赤毛で、まるで死神を思わせる鎌をもっている。人間サイズの生物だとしたら、女性の中では背が大きい方だろう。
と言っても、巨大な金属生命体のスカイワープにとってはそんな事はどうでもいい事だが。

「なんだおめぇさんは」

そういわれると、少女はスカイワープの腹部に乗っかる。

「あたいかい？あたいは小野塚小町っていうのさ！」

堂々とスカイワープの腹部に乗り、そう名乗る。

「そぉかい、それよりよぉ、俺の腹から降りちゃくれねぇか？」

「・・・・・・・」

急に小町は真剣な顔になった。

なんだ？とスカイワープが思った瞬間、こんな事を口にした。

「あんた、あたいと口調に似てるね」

不意、どうでもいい話しであった。

「・・・・・・どぉでもいいだろぉがよぉ。これ気に入ってんだ」

本当にどうでもいい事だ。

だが、確かに言われてみればそうだ。

スカイワープは一応江戸っ子口調で喋っているが、その気になれば違う言葉、英語も話せる。

彼は元々セイバートロン語しか喋らなったが、地球の『言語』をスキャンしたのだ。

だが、スカイワープは『江戸っ子口調』をスキャンしてしまったらしい。

しかも彼はその口調を気に言っているらしく、変える気もないらしい。

「ふぅん、あんた、見るからにして妖怪とも人間とも――――神とも言い難いんだけどねえ」

そういって、彼女はスカイワープの腹部から降りる。と言うより瞬

間移動する。
彼は少々驚く。
そして、スカイワープは上半身だけを起こした。
「俺は『スカイワープ』ってんだ。で、種族的に言えば『トランスフォーマー』って言ってな。宇宙からきたんだ」
ええっ！
小町そう驚いた様な表情を浮かべた。
予想どうりのリアクションにスカイワープはため息をつく。
「と言うと宇宙人じゃん！でもどう見ても機械じゃなかい？」
「俺達は、さっきこの村に来たんだ。自我を持った機械生命体なんだぜぇ？個体によって個性があるんだ――まあ、いやな個性的な奴が逆に多くても困るんだがね」
どっかのニューリーダー（笑）を思い浮かべて言う。
まあ、彼も人の事を言えた事じゃないが
「へぇ。ん、待てよ。俺『達』？あんただけじゃないの？」
「ああ、さっきまで一緒にいたが――別れちまったな。まあ、清々したがね」
「ふぅん。あんた一人で大丈夫なの？」
「正直言えばな――色々面倒だなぁ。第一、エネルギーをどうやって補充するかが問題だぃ」

「・・・・色々大変なんだね」

「これも全てスタースクリームのせいなんだぜ？ふざけた野郎だ」

「あんたはどんな事をしてたのさ？」

「俺か？デストロンって言う軍団で働いててねぇ、まあ悪の限りを尽くした」

「悪の・・・・？」

小町は訳が解らない様な表情でスカイワープを見る。

「確かに色は悪っぽい」

「いや…色じゃなくてなぁ・・・・」

「冗談だよ冗談。で？」

「まあ、主に破壊する様な事だ。同種を殺してたんだぜぃ？」

「ふぅん、今のあんたを見る限り、そんな事しそうには思えないねえ」

彼女の言葉にスカイワープは唖然とする。

意味が解らない。なんでそんな風に見えるんだ？

「はぁ？何処がだぃ」

「何か…そんな冷徹じゃなくて…あんたは――温かいモンを感じ

てね」

さり気なく、笑いながら言う。

「温かいもん・・・・か。そういや…メガトロン様にも――――そんなもんを感じた時があったな」

＊

それは彼がメガトロンの元として、スタースクリームの部下として働いていた時の事――――

「メガトロン様、作戦は大成功でさぁ！」

スカイワープが単独の作戦を成功させた時の事だった。
悪の軍団、デストロン。
そんな肩書がある組織――――
だが――――

「よぉしよし、良くやったぞスカイワープ。お前のおかげで大量のエネルゴンが手に入った。ゆっくり休んでいてくれ」

悪の軍団のトップとは思えない言葉。
いわゆる優しさが感じられた――――

メガトロンでも怒る事もあれば、部下を褒める事もある。
彼は、失敗すれば怒り、うまく成功させれば褒める。
まさにアメとムチだ。
はっきり言えば理想の上司とも言えるだろう

＊

そんな事を思い出していた――

（メガトロン様も…根本的に良い人だったな）

「なぁに、思いつめた様な顔してんだい」

「いやなに、昔の上司の優しさを思いだしてな」

「上司の優しさ――か。解らなくもないね」

「そうかぃ。よくよく考えていたら――俺の組織のトップは――悪と呼ばれながらも優しいお方だったよ」

「気偶だね。あたいの上司も、閻魔と呼ばれながらも良い人だよ」

「「・・・・・・」」

「お前と俺って似てないか？」

「そうかい？あたいは悪い事はしてないけど？」

「それは言うな」

「・・・・それを省けば…あたいら結構似てるかも」

「そうだな…ん、まてよ。お前さっき俺の腹から時、瞬間移動したな？」

「え？ああ、あれね。距離を操る程度の能力って言って、目的地の距離を縮めたりできるのさ」

「おいおい。お前と俺って色々かぶってねぇかい？俺は瞬間移動できる」

「「・・・・・」」

「かぶってるね」

「本当だぜ・・・・」

ズドォオオオン！

「なぁにサボってるんですかぁあ！」

いきなり何処からともなく、少女が飛び出してきた。

「小町！」

「は、はい！」

「貴方はまたサボってるのですか！何百回言えば――――気が済むのかしら！？」

「すみません！」

今説教をしている者は四季映姫・ヤマザナドゥ。
幻想郷を担当する閻魔だ。
主に、白黒はっきりつける事ができ、人の罪を裁くのが日課である。
「大体あなたは、生前の罪を裁く者の一員なのですよ！？私達は常に身を正す必要があるのですよ？」
「すみません、すみません！」
（・・・・説教屋かぃ？）
「そしてまたサボってると思ったら――――真っ黒ロボットとお喋りですか・・・・」
「おい、真っ黒ロボットってなんだよ」
スカイワープは少し怒りを籠め、問いただす。
「見てのとうり、貴方の事です」
「はぁ！？俺は真っ黒じゃねぇ！紫色もはいってるだろぃ！」
「なに言ってるんですか！見る限り貴方は罪に罪を重ねた者じゃないですか！」
「な、なんで解るんだぁ？」

「長年の・・・・閻魔としての勘。とでも言っておきましょうか。
まぁ、この鏡を使えば、貴方の過去なんて丸わかりですけどね」

四季映姫は、鏡を取り出す。
そして鏡には――――

『おらぁ！サイバトロン共！くたばりやがれぃ！』
『ははははははッ！」
『テメェ等なんざ雑魚だぜぃ！』
『メガトロン様。とうとう復活の時がやってまいりました』
『くらえ！とっておきのミサイルだ！』
『ぐわぁあああ！被弾したぁ！』
『てやんでぃ！』
『許可証がない限り、スペースブリッチを使わせるなとメガトロン様の命令だ』
『わ、解った、やるよ…』
『サンダークラッカー！スタースクリームの野郎に思い知らせてやろうぜ！』
『バァハハ～イ』
『見たか！これが俺様のテレポート攻撃だ！』
『反対たぁい・・・・』
『ぎゃあああああッ』

「「……」」

「な、なんで俺の過去が・・・・」

「悪い事・・・・って言ってもなんだかにぎやかだったね・・・・」

「ですが…、罪を重ねた事は確かですよ」

「だからなんだよ」
「いいですか？貴方は物凄い力を持っていながら、それを罪にしか使わなかった…」
「・・・・・」
「第一、貴方は破壊しかやっていない・・・・・」
「そんな破壊工作の中、貴方はまるで反省の意も無し。後悔の根もない・・・・・」
「おい・・・・・」イラッ
「第一、貴方の知能は高いが雑がある・・・・・」
「しかもオッチョコチョイな面もある・・・・・」
「仲間をもからかい、喜ぶ一面もある・・・・・」
「そしてそんな軽はずみで貴方はいつも失敗する」
「だから・・・・・ッ」
「そう、貴方は何事においても適当すぎる」
「お前・・・・・ッ。言いたい事はそれだけかぃ？」
「いいえ…まだまだありますよ？」
「チッ」
「だが…貴方は死んだとしても、地獄にも天国にも行けない様です

ね…。貴方の魂は、この地の魂とはまた違う・・・・」

「そりゃそうだろう。俺の魂はスパークだ。お前等みてぇに見えない物じゃなく、実質的に物質として存在してる者なんだ」

「そんな貴方――――死んでも罪を裁けない。裁く方法はただ一つ――――」

「…？」

「その体に直接裁きを与える事です」

「てやんでぃ！俺に裁きなんざいらねぇよ！なんだって…一回死んだも同然の身だぜ、俺は」

「…そうですね。さっきの鏡を見る限り、貴方は空へと投げられた様ですね。ですが、何故か此処に健全している

そして、今。貴方には目的がない」

「確かにそのとうりだ。俺は帰る方法が解らない。今この地でやる事もねぇからなぁ～」

「目的がない…と言うのは死んだも同然です。何もせず生きるのは有罪であり・・・・目的の為に頑張るのは無罪」

「はぁ？」

「貴方は第一に、目的を見つける事から始めなさい」

「・・・・・目的・・・・・ねぇ。まぁ、暇だったら見つけるぜぇ」

と、スカイワープは不貞腐れ気味に行った。
四季映姫は少し安心の表情を浮かべた。
そして――――

「さて、小町」

「は、はい！？」

「貴方の説教の途中でしたね・・・・。再開しますよ！」

「はぁ・・・・」

「ため息つかない！シャキッっとしなさい！」

「きゃんッ！」

（なんだかんだ行って――――説教ってのはサイバトロンより苦手だぜ・・・・）

出会いを求め－Ｓｋｙｗａｒｐ－（後書き）

スカワ　「あぁ～、説教はこりごりだ…」
小野塚　「そうだね…」
四季映姫「文句言ってる暇があったらやるべき事やりなさい！」
小野塚　「すみません！」
四季映姫「あなたは目的を探しなさい！」
スカワ　「ワルモンに説教なんてよぉ…意味ねぇんじゃないかぃ？」
小野塚　「私だってちゃんと目標の数は集めてますよ？」
四季映姫「屁理屈を言わない！もっと説教する必要がありますね！」
スカワ＆ａｍｐ；オノヅカ「ぎゃあああああああッ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0036v/

ジェットロンが幻想入り！

2011年10月8日17時24分発行